

「障害の宇宙モデル」の提案に向けて

広瀬浩二郎（国立民族学博物館）

1. 三色旗から三触旗へ

2016年8月、学習まんが『ルイ・ブライユ』[1]が刊行された。僕は「ストーリー協力」という形で本書の企画・編集に関わった（図1）。まんがのベースとなるシナリオ作成に当たって僕が意識したのは、いわゆる「当事者」の立場である。ルイ・ブライユ（1809～1852）に関する史料は不足しており、点字発明前後の詳細な状況など、不明な部分が多い。そこで、時代と環境は異なるものの、ブライユと同じ全盲である僕自身の体験、点字に対する思いなどをシナリオに盛り込んだ。

従来の伝記では、ブライユは視覚障害者に「光＝文字を読み書きする喜び」を与えた偉人として取り上げられてきた。今回の学習まんがにおいて、僕は「ブライユは人類に真の自由・平等・友愛をもたらした『フランス革命の大成者』である」と主張している。点字に込められた創造力・発想力が、見常者（見ることに依拠して生活する人）のライフスタイルを変化させる可能性を秘めていることを力説したつもりである。本書が小学校などの教育現場で広く活用されることを期待している。

この本の大きな特徴として、ユニークな「さわる表紙」を挙げることができる。表紙には点字とともにフランス国旗の触図が印刷されている。触図とは、視覚障害者が写真や図などのグラフィック情報を理解するために、盲学校や点字出版所で主に教材として開発・利用されている技法である。凹凸の線や点の組み合わせ、あるいは特殊なインクを用いて画像を触覚的に表現する。つまり、視覚情報を「さわってわかりやすい形式」に置き換えるのが触図のエッセンスだといえる。近年では

「さわる図録」を製作する博物館・美術館も少しずつ増えている。

こういった触図作りの原則を否定するわけではないが、三色旗の触図化に際して僕がこだわったのは触覚表現のオリジナリティだった。三色旗の青・白・赤を触覚的に表すという考え方を僕は採用しない。そもそも三色旗とは、フランス革命の理念である自由・平等・友愛を象徴しているともいわれる。すくなくとも、世界中のさまざまな人々が各人各様の自由・平等・友愛の理想を三色旗に託し、この旗から勇氣と希望を得てきたのは間違いない。それでは、自由・平等・友愛を示す触覚表現とはどんなものなのだろうか。

ルイ・ブライユの登場以前、各地の盲学校では視覚文字を凹凸化した「浮き出し文字」が使われていた。ブライユは「視覚には線文字が適しているが、触覚で速く正確に読み書きできる文字は、点で構成する方が合理的である」という当事者の論理に立脚し、まさに手探りの試行錯誤を重ね点字を完成した。三色旗の触図化を通じて、僕はブライユの精神を多少なりとも具現することができたので



図1 ルイ・ブライユの本を手にする筆者

はないかと自負している。大げさに言うなら、三色旗から三触旗への転換と要約できるだろうか。

三触旗では自由を斜線、平等を無地、友愛を点点で表した。この触図表現は僕の趣味、いわば独断である。無地は自由、点点は平等ではないか、斜線ではなく縦線・横線を使うべきだという意見もきつとあるだろう。また、点の大きさ、線の太さについても好みは分かれるかもしれない。三触旗談義がきっかけとなり、点字のみならず、触図への関心が各方面で高まれば幸いである。本来の触図とは視覚情報を触覚に置き換えるものではないことを強調するために、あえて三触旗には色を付けなかった。障害の有無に関係なく、たくさん見常者が学習まんがの表紙にさわって、十人十触の自由・平等・友愛の夢を心に描いてほしいと願っている。

2. 見せる、聴かせる、さわらせる

僕が講演、学会発表などをする時、常に目標としているのは聴覚と触覚で情報を伝えることである。昨今はどこへ行っても「見る／見せる」講演が一般的で、大学の講義でも大半の教員が動画・画像を駆使している。大量の情報を迅速に送受信するという点で、視覚に勝るものはない。「こちらをご覧ください」と言ってパソコンを操作すれば、会場(教室)にいる全員に、ほぼ同時に視覚的な像(イメージ)を届けることができる。視覚による情報伝達は「より多く、より速く」という近代的な価値観に適合し、文字どおり各方面で「注目」されるようになった。視覚こそが高度情報化社会を牽引してきたといえるだろう。

そんなトレンドに背を向けてというべきか、全盲の僕は「言霊＝目に見えない言葉の力」を信じている。講演では、できるだけマイクを使わず、大きな声で聴衆に語りかける。平曲や瞽女唄などの音楽 CD も積極的に使用す

ることにしている。「聴く／聴かせる」講演にはマニュアルがなく、便利なパソコンソフトに頼ることもできない。琵琶法師や瞽女の語りの迫力に比べると、僕はまだまだ未熟である。不特定多数の見常者に「注耳」されるような講演をめざし、引き続き精進しなければならない。しかし、50歳を目前にして、やっと最近、自分なりの情報伝達法が固まってきた手応えを感じているのも事実である。

「聴く／聴かせる」要素に加え、僕のレクチャーでは民族資料など、多種多様なモノを触察する時間も重視している。視覚・聴覚情報は、インターネットを介して瞬時に遠隔地に伝えることができる。だが、現代の最先端のテクノロジーを用いても、モノの質感をデジタル化し、パソコンでやり取りするのは難しい。触覚情報はその場に行き、手を伸ばし動かすことによって獲得される。手を動かすと脳が活性化し、会場の一体感も増す。これが「さわる／さわらせる」講演のメリットだろう。見る・聴くはどちらかという受動的な行為だが、さわる体験が入ると、参加者が能動的になるのも確かである。

ただし、聴衆の数が増えると、必然的にモノの回覧時間が長くなる。会場前方の聴衆は、僕の解説を聴きながら触察を楽しむことができるが、モノが後方の席に回るころには、講演は別の話題に移っている。この時差を解消するためには、人数分の触察資料の準備が必須であるが、購入費用、運搬方法などを考えると、あまり現実的ではない。モノをさわると会場内がざわつき、私語が飛び交うのは、能動性という意味では歓迎すべきだが、やはり講師は自身の語りに集中しにくくなる。「さわる／さわらせる」講演の方法に関しては、更なる改善が不可欠だろう。今後も、聴衆と講師の相互接触(触れ合い)の場を創出できるプレゼンのあり方を模索していきたい。

たしかに、「見る／見せる」講演の長所は

多々ある。とはいえ、社会の多数派が「見る／見せる」講演を当たり前のものとし、視覚依存の日常にどっぷり浸かっている付和雷同的な風潮に、僕は疑問と不満を抱く。「見る／見せる」講演の普及・定着は、ややもすると世界観・人間観の画一化を惹起し、見るができない者の生き辛さを増幅してしまう。五感といわれるように、人間は多様な感覚を保持している。見せる講演があるのなら、聴かせる、さわらせる講演があってもいい。視覚以外の感覚を再評価・再認識する姿勢も忘れてはなるまい。「聴かせる、さわらせる講演は反近代ではなく、脱近代を志向する」と、僕は自分を鼓舞している。視覚優位、視覚偏重の近代文明に一石を投じる心意気を持って、これからも我が講演術を磨いていくことにしよう。

3. 「バリアフリー」と「ユニバーサル」の違い

2006年の企画展「さわる文字、さわる世界」の開催以後、僕は「ユニバーサル・ミュージアム」(誰もが楽しめる博物館)の実践的研究に取り組んでいる[2]。もともと博物館とは近代化の象徴、「見る／見せる」文化施設として誕生した。古今東西、博物館の主な役割は、貴重な資料を市民に公開する(見せる)こととされている。展示というメディアを通じて、時に博物館は国・為政者の権威・権力を誇示する視覚的演出に加担してきた。

そんな「見る／見せる」文化施設が21世紀の今日、「冬の時代」を迎えている。世界各地の博物館では来館者数が伸び悩み、予算も縮小傾向である。たとえば、僕が勤務する国立民族学博物館(民博)は1977年に開館した。オープン当初、「民博に行けば、外国の珍しい物を見ることができる」という理由で、多くの来館者が集まった。ところが現在、日本人は気軽に海外旅行に出かけ、またインタ

ーネットやテレビの汎用化に伴い、自宅に居ながらにして「珍しい物」を簡単に見ることができる生活環境を手に入れた。わざわざ博物館に足を運ぶ意義は相対的に低下しているといえる。高度情報化社会の到来により、人類は近代の申し子である博物館の存在を根本から問い直すことになった。

ピンチはチャンスなりというが、来館者数が減少する博物館の中で、「今まで館に来なかった(来ることができなかった)人々を呼び寄せる工夫をしよう」という動きが出てきた。子どもや高齢者、外国人、障害者など、いわゆる「社会的弱者」を対象とするさまざまな取り組みが盛んに行われるようになったのは、この20年ほどの国際的な潮流である。僕が2001年に民博に就職したのは単なる偶然だが、結果的に日本で障害当事者が博物館業務に携わる先駆となった。同僚の教職員のサポートの下、視覚障害者に対するバリアフリーの一助として、僕は点字パンフレットの配布、広報誌の音訳版発行などを提案・実現した。博物館の「冬の時代」は、障害者サービス(マイノリティ支援)伸展の好機であるのは間違いないだろう。

ここでバリアフリー(障壁除去)とユニバーサル(誰もが楽しめる)の相違を説明する。活字が読めない・読みにくい視覚障害者に点字パンフレット、音訳雑誌を提供するのはバリアフリーである。バリアフリーとは「障害者の足りない部分を補う=補助」の発想に立脚している。「視覚を使えない」人々に対し、どうやって視覚情報を補っていくことができるのか。この問いかけが視覚障害者対応のバリアフリーのスタートであり、ゴールでもある。歩くことができない車いす使用者のために、スロープを設置する。音声言語によるコミュニケーションが難しい聴覚障害者のために、手話通訳者を手配する。これらもバリアフリー施策の代表例といえよう。

一方、ユニバーサルは「障害者の残存能力を保ち最大限活かす＝保助」の思想を基本とする。障害者の「生き方＝行き方」（ウェイ・オブ・ライフ）を非障害者、マジョリティに応用するのがユニバーサルのもう一つの要件である。「視覚を使わない」人々の触覚・聴覚活用術を博物館展示に取り入れようという試みから、ユニバーサル・ミュージアムを追求する壮大な実験が始まる。

「さわる文字、さわる世界」展の企画の初期段階で僕が主題としたのは、視覚障害者に対するバリアフリーの充実だった。視覚障害者が展覧会を楽しむためには、さわられるモノがなければならないという信念を持って、僕は触察可能な資料を収集した。しかし、展示計画が進む過程で、僕は見常者にとって“さわる”とはどのような意味があるのかと考えるようになった。視覚に依拠して日々の暮らしを送る見常者は、“さわる”ことの大切さを忘れていた。彼らこそ“さわる”べきではないか。僕の中で「視覚障害者が楽しめる→視覚以外の感覚を用いて学ぶ→視覚中心の近代的な博物館のスタイルを再検討する」という思考の流れが生まれ、ユニバーサル・ミュージアムの理念が整理された。

「誰もが楽しめる」を具体化していくためには複数の切り口があり、視覚障害者に着目するのはその一つでしかない。だが僕はこの10年余、ユニバーサル・ミュージアムを先導するのは視覚障害者であると公言してきた。肢体不自由者、聴覚障害者などの場合、バリアフリー的なハード・ソフトが整備されれば、「見る／見せる」博物館を満喫することができる。他方、視覚障害者は点字パンフレット、音声ガイドが用意されても、博物館を「見学」することができないのである。現在の日本のユニバーサル・ミュージアム運動では視覚障害者対応、「さわる展示」の探究がメインテーマとなっているが、それは博物館が「見る／

見せる」施設として成立・発展した歴史に由来するといえるだろう。

視覚障害者（触常者＝さわることによって生活する人）の触学・触楽のテクニックを敷衍することによって、脱近代型のユニバーサル・ミュージアムを拓く最新事例を紹介したい。2016年7月～11月、兵庫県立美術館で企画展「つなぐ×つつむ×つかむ—無視覚流鑑賞の極意」が実施された。僕はプロデューサー兼アドバイザーとして、本展の企画・運営に全面的に協力した。「無視覚流鑑賞」は僕の造語である。企画展に来場した見常者はアイマスクを着け、視覚を使わない状態で三つの彫刻作品を鑑賞する。「つなぐ」「つつむ」「つかむ」は触察のノウハウをわかりやすく解説するキーワードである。三つのキーワードに即して、実際に僕が作品を鑑賞する「生の声」を録音した。この録音データは、“さわる”鑑賞の「手引き」となる音声ガイドとして来場者に提供された。

無視覚流は、視覚障害者の美術鑑賞を疑似体験するものではない。視覚以外の感覚を総動員して彫刻と向き合い、目に見えない作品の魅力が全身でとらえるユニバーサルな美術鑑賞法が無視覚流なのである。来場者のアンケートでは、「無視覚流鑑賞は難しいが、新鮮でおもしろかった」という感想が目立つ。「つなぐ」「つつむ」「つかむ」は美術展示だけでなく、他分野にも適用できるので、無視覚流鑑賞の続編、バージョンアップの準備を始めている。今回の兵庫県美の企画展は「さわる展示」の新展開、保助の概念に基づくユニバーサル・ミュージアムの成功例と位置づけることができるだろう。

4. 伝える体、伝わる心

2016年9月25日、僕は国立天文台で開かれた「第3回ユニバーサルデザイン天文教育研究会」に講演者として参加した。講演を引

き受けるに当たって、僕には迷いがあった。講演そのものがユニバーサルデザインの実践例となることを願い、僕は画像・映像を使わず、触覚と聴覚で研究発表するよう心がけた。講演前半では三触旗と無視覚流鑑賞の話題を取り上げ、触覚による情報処理の特性を概説した。

問題は講演の後半である。ここ数年、僕の講演では平曲の CD を会場に流し、琵琶法師の語りがスローテンポであることを聴衆に実感してもらっている。前近代の日本人はスローテンポの語りを耳で聴き、その聴覚情報を身体内に取り込み、源平合戦の場面など、自身が見たことのない風景を鮮やかに思い描いていた。僕は、平曲とは「音と声で色を創る聴覚芸術」だと定義している。盲人芸能者は、聴覚情報を視覚情報に変換するアーティストともいえる。生演奏ではなく CD というのが残念だが、琵琶法師の語りは「見る／見せる」現代文明に強烈な反省を求める力を内包している。

今回の天文台の講演でも、いつものように平曲の CD を使うのが僕にとっては自然な流れであり、参加者にインパクトを与えることも確実だろう。だが、研究会には聴覚障害者が多数出席する。僕自身、「ユニバーサルデザイン」を冠する研究会で画像・映像が多用されると、疎外感を味わうに違いない。障害の種別は異なるが、当事者である僕が堂々と音楽を「聴く／聴かせる」講演を行うのはいかなものか……。

音楽を用いず、触覚関連のケーススタディのみで講演を組み立てることも検討した。しかし、講演日直前になって「参加者に聴覚障害者がいるから音楽は使用しない」という配慮(?)はどこかおかしいことに気づいた。あくまでも「自分が何を伝えたいのか」を最優先で考え、次に「では、それをどう伝えればいいのか」と思索を進めるのが生産的では

ないか。

ユニバーサル・ミュージアムを構想する際、僕は「人に優しい」と「人が優しい」を区別している[3]。「人に優しい」の背後には、多数派から少数派への親切の押し売り、「してあげる／してもらおう」という一方向の人間関係に陥る危うさが見え隠れする。音楽を聴くという点で、僕は多数派である。マイノリティの尊重を訴え、「人が優しい」を標榜する本人が、「人に優しい」配慮(?)をしようとしていたとは、なんとも恥ずかしい。平曲を流すことが僕の講演にとって大切であり、多くの人に平曲の魅力を知ってほしいと望むのなら、遠慮なく CD を使えばいい。ただし、聴覚障害者に音楽の雰囲気伝える工夫はしっかりとしなければならない。ようやく、講演に臨む僕のスタンスが定まった。

繰り返しになるが、僕が平曲の本質として最重要視するのは、語りのテンポが遅いという点である。琵琶の音と語りの声を耳でとらえた聴衆は、じっくりと時間をかけて能動的に『平家物語』の歴史絵巻を想像・創造していた。前近代は、かならずしも視覚優位の社会ではなかったことを体感してもらおうのが、僕の講演の狙いである。今回の講演において、僕は平曲の語りのスピードに合わせ、ゆっくりと左右に身体を振ってみることにした。平曲の遅いテンポを視覚的に表現したつもりである。

いきなり中年男性が身体をくねくね動かすだけでは、じつに怪しい。そこで、僕は両手で「雨の木」を持って、身体の揺れと同期させた。雨の木とは、サボテンの莖の中に砂や小石を入れた南米の民族楽器である。上下・左右に傾けることによって、サラサラという音を出す。最近は砂や小石の代わりにビーズを用いることが多いが、ゆるやかに向きを変えれば小雨に、一気にひっくり返せば大雨に聞こえる。

雨の木は、南米の人々が「どうすれば雨の音に近づけるか」と思案し、サボテンの茎の種類、砂や小石の分量を調整して作り上げた楽器である。この楽器には「雨の音」を聴かせたい、聴いてほしいという制作者、演奏者の強い気持ちが込められている。聴かせたい、聴いてほしいという熱い思いは平曲の語り手、さらには「視覚を使わない」講演を行う僕とも重なり、時空を超えて響きあう。

音の高さ、長さを数値化しグラフにすれば、聴覚障害者にリズムやメロディー、曲調をなんとなく伝えることはできるだろう。しかし、(やや非科学的ではあるが)それでは聴かせたい、聴いてほしい気持ちは伝わらない。天文教育研究会での僕のタコ踊りは、聴覚障害者に音楽の雰囲気伝える手段としては明らかに不十分である。批判や不満もあるに違いない。だが、平曲がゆったりと語られる口承文芸であること、平曲の音声を視覚化するために、中年盲人(自称「琵琶を持たない琵琶法師」)が変てこな踊りをしたことは、研究会参加者の印象に残ったのではなかろうか。

講演終了後、何人かの聴覚障害者が雨の木に触れ、その重さや手触りを確認してくれたのは嬉しかった。ちなみに、雨の木のサラサラという音は波音にも聞こえるので、海戦の情景描写を盛り上げる聴覚的効果もあると感じた。

5. 無視覚は無資格だけど無死角なり

ユニバーサルデザイン天文教育研究会の午前の講演で、僕は「伝える」難しさとおもしろさを実体験した。タコ踊りの勢いのままに、午後のワークショップで僕が出席したのは「手話の人と旅する宇宙」だった。本ワークショップの企画担当者は「手話の人」(ろう者)である。このワークショップでは手話、もしくは身振りや筆談で会話することがルールとされている。僕は音声がない「静かな」空間

に投げ込まれた(いや、自ら進んで足を踏み入れた)。

視覚障害者と聴覚障害者は同じ「障害者」に分類されるが、それぞれの属性、ニーズはかけ離れている。単純な話、視覚障害者は聴覚情報で、聴覚障害者は視覚情報で外界を把握する。物音、人声から情報を得ることができないワークショップは、視覚障害者にとって居心地が悪い。しかし、居心地の悪さの先には新たな気づきと発見があるのではないか。普段は直接交流する機会が極端に少ない視覚障害者・聴覚障害者が、ワークショップの中で互いに居心地の悪さをなんとか乗り越えたいと願う。これこそが「ユニバーサル」を開拓する知的冒険、「難しいけれどおもしろい」応用問題の出発点となるはずである。

率直に言って、「手話の人」ワークショップに全盲の視覚障害者が乱入(?)するのは想定外だった。「ユニバーサル」の趣旨を踏まえ、僕の参加を認めてくださったワークショップ主催者には感謝している。ワークショップでは音声言語が使える聴者が僕の横につき、小声で手話の通訳、状況説明をしてくれた。役得というべきか、ろう者の手に僕の手を軽く重ね、手話にさわらせてもらう時間もあつた。

僕は、言語として手話を理解することができない。だが、時に力強く、時に繊細に動く「手」から、聴かせたい(感じさせたい)、聴いてほしい(感じてほしい)熱意がひしひしと伝わってきた。手話にも「言霊」が宿っていることに理屈抜きの感動を覚えた。それは「喋る手」(ろう者)と「感じる手」(全盲者)の衝撃的な出会い、相互接触(触れ合い)の場が現出した「手放しの歓喜」ともいえるだろう。

「手話は言語である」とよくいわれる。僕は点字と手話の比較に興味があり、ろう文化関係の本を何冊か読んでいます。だから、手話が言語だというのは僕の中では一つの見識だ

った。一般に、豊富な見識を持つ人が有識者として尊敬される。見ることによって「識」が蓄積されるというのが世間の常識である。見ることができない視覚障害者は、点字ディスプレイ、活字読み上げ装置などの視覚代行機器を導入して、見識を育んできた。

そもそも見識があるのなら、聴識や触識があってもいいのではないか。人々が多様な「識」を持ち寄れば、豊かな社会を築くことができる。障害者は、マジョリティとは異質の「生き方＝行き方」(ウェイ・オブ・ライフ)を経験することで、ユニークな「識」を会得した有識者なのである。今回、僕はろう者の「喋る手」に触れて、「手話は言語である」ことを確信した。それは目で見るだけではわからない身体知、自らの手で能動的につかんだ触識ともいえるだろう。

近年、欧米の障害学 (disability studies) などの研究成果に裏打ちされた「障害の社会モデル」という理論が、障害を定義する際の世界的な共通理解になっている。2016年4月に日本で施行された障害者差別解消法の底流にも「障害の社会モデル」の考えがある。従来の個人モデル、医学モデルと一線を画する社会モデルでは、障害とは個人と社会の関わりから生まれるととらえる。それゆえ、人間社会全体の努力により、障害は解消できると規定するのが社会モデルの特徴である。

しかし、社会的包摂、社会的排除という用語が端的に示すように、社会とは所詮、人間の都合で形成されたものでしかない。社会から排除するのも人間なら、社会に包摂するのも人間なのである。社会モデルの概念は、「障害」を取り巻く状況を劇的に変化させた。僕自身も、社会モデルという21世紀的な障害観の定着を支持する。だが、「社会」を前提としていては、障害者(マイノリティ)のより良い生の達成、マジョリティとの共生の進展には、自ずと限界がある。排除と包摂の歴史

は半永久的に繰り返され、人間は次々に新しい「障害」を創り出す。これは少々悲観的な予想である。とはいうものの、残念ながらこの予想を覆す論拠は今のところない。

ここで僕は「障害の宇宙モデル」という試論を提案したい。「障害」という社会通念を広大な宇宙に解き放つのが宇宙モデルの本義である。この私論に従うならば、ユニバーサルデザインとは宇宙的デザイン、すなわちさまざまな社会通念(人間の常識)を宇宙に解き放つためのデザインということができる。宇宙は無限の可能性を秘めていると同時に、否応なく人間に不可能を突きつける機能をも有する。ワークショップ「手話の人と旅する宇宙」に参加した時、僕は最初、孤独感と無力感に苛まれた。宇宙空間に投げ出されれば、人間は「できない」ことがあまりにも多い現実気づく。考えてみると、視覚障害者が見常者中心の社会で生きていくということは、日々宇宙旅行しているようなものなのかもしれない。

日常的に「できない」に直面する障害者は、不可能を可能に変える強さと優しさを保持している。僕がワークショップで出会った「喋る手」にも、この強さと優しさが脈打っていた。誤解を恐れずに言えば、常ならざる「識」を操る障害者は、宇宙時代のパイオニアなのである。果てしなく拡張する宇宙には、排除も包摂もない。目に見えないもの、耳に聞こえないものに満ち溢れている宇宙に飛び出せば、視覚障害、聴覚障害という社会通念自体が成り立たなくなる。

僕は、目が見えない自身の境遇を客観的に説明する際、「無視覚は無資格だけど無死角なり」という語呂合わせをよく使う。無視覚とは、目が見えないという厳然たる事実、障害学の「impairment」に相当する。無資格は、視覚障害に付随して、社会的不利益を被ること。たとえば、公的試験における受験拒否、

就職差別などは無資格の一例だろう。社会モデルでは、無資格こそが障害の本質であり、それは人間の知恵によって取り除くことができるとされる。無死角は「障害の宇宙モデル」のスローガンである。全盲者は前後・左右すべてが見えない。逆説的な言い方になるが、死角がないのが全盲者なのである。「見える／見えない」の区別がないのは、全盲者の強みではなかろうか。

私見では、視覚障害をとらえる視座は、無視覚（医学・個人モデル）の受容、無資格（社会モデル）の自覚、無死角（宇宙モデル）の発信へと深化する。僕自身の半生を振り返ってみても、少年期は無視覚、青年期は無資格、壮年期（現在）は無死角を意識しつつ、より良い生を求めてきたように思う。

宇宙という観点に立てば、「障害／健常」という陳腐な二分法は改変を迫られるだろう。「障害の宇宙モデル」はまだ大風呂敷を広げただけで、これからしっかり理論武装して

いかなければならない。天文教育に関連する学際的な研究、真のユニバーサルデザイン（「障害」という社会通念を宇宙に解き放つデザイン）を切り開く実践的研究の融合。そんな理想を追い求めるユニバーサルデザイン天文教育研究会の活動を通じて、「障害の宇宙モデル」という新パラダイムが成熟していくことを切望する。

文 献

- [1] 新井隆広（まんが） 広瀬浩二郎（ストーリー協力） 大内進（監修）（2016）『学習まんが人物館 ルイ・ブライユ』，小学館
- [2] 広瀬浩二郎（2012）『さわって楽しむ博物館 —ユニバーサル・ミュージアムの可能性』，青弓社
- [3] 広瀬浩二郎（2016）『ひとが優しい博物館 —ユニバーサル・ミュージアムの新展開』，青弓社

* * * * *